

薩摩川内の気になるコト

純大生・作

2014年 2月号

広報薩摩川内
×
鹿児島純心女子大学
第6回
～薩摩川内市の名前の由来～

私たちが企画・編集
しました。



鹿児島純心女子大学 広報委員

薩摩川内市の名前の由来

今回は名前の由来です。県外に出ると「薩摩」は読んでもらえても「川内」はなかなか読んでもらえないですよ。皆さん、なぜ「せんだい」と読むんだろうと疑問に思ったことはないですか。そんな疑問を解決してきました。



可愛山陵

漢字はもともと異なり、古くは「千台」(旧字体で「千臺」)だったようです。また、「千台」となったのにもいくつか説があるそうです。まず1つ目は、その昔ニギノミコトが、「千の台」(うてな)を作るように命じたという神話からという説。2つ目は川内川の北側(内側)に国府や国分寺が置かれており、川北を「川内」、川南を「川外」と呼んでいたことに由来するという説。時代によって「千臺」「千代」「千台」「川内」など、いろいろな字が使われており古文書によっても異なります。また、江戸時代に当時の薩摩藩主島津吉貴が地図を作成するときに「川内」の文字に統一したそうです。それが最終的に昭和4年に行政単位としての「川内町」になり、平成16年の市町村合併により「薩摩川内市」となったわけです。

(参考文献) ●川内市歴史資料館編『川内市文化財要覧』

●『角川日本地名大辞典 46 鹿児島県』

●川内市教育委員会文化課・川内市歴史資料館編『せんだい歴史絵日記』



いかがでしたか。こうやって調べてみると面白いですよ。川内にもっと興味がわきました。さて、これで私たちのコーナーは最終回です。ここまで6回約8カ月間、皆さんありがとうございました。本当に楽しかったです。またこのように取材できる日を、皆さまに会える日を楽しみにしています。



新田神社文書の川合陵



三国名勝図会の川合陵



入口の鳥居



社殿の様子

「川合」の名称については、諸説ありますが、川内川の支流である高城川と麦之浦川が合流する場所であることに由来しているようです。

川合陵は現在の五代町に位置し、その一帯の山は「冠山」・「川合山」と呼ばれています。高さは20m、周囲は500mに及び可愛山陵をはじめとした陵墓が並ぶ神亀山と比べると小規模です。麓には、新田神社の末社である川合陵神社があり、鳥居や石塔・社殿などがみられます。この陵墓は、元々冠山の山上にあったとされており、「三国名勝図会」や「新田神社文書」からもその様子がうかがえます。

今回紹介した文化財位置図



- 注釈
- ※1 天皇家の墓
 - ※2 本社に付属する小神社
 - ※3 江戸時代に薩摩藩が編纂した文書。薩摩・大隅地方などの地誌や名所が挿絵付きで記されている。
 - ※4 国の指定文化財でもある新田神社の文書子どもであったとする資料もある。
 - ※5 愛知県尾張地方を治めた国司氏族
 - ※6

川合陵は、天火明命の陵墓であるといわれています。

天火明命は、新田神社(可愛山陵)で祭られている瓊瓊杵尊の皇兄にあたり、古事記や日本書紀などに記述がみられます。太陽神や農耕神としての一面を持ち、尾張連の祖神であるといわれています。



川合陵の石灯籠

今回で「そこが知りたい!歴史散策シリーズ」は終了します。ご愛読ありがとうございました。

	可愛山陵	中陵	端陵	川合陵
属する山	神亀山	神亀山	神亀山	冠山
神社名称	新田神社	中陵神社	端陵神社	川合陵神社
所在地	宮内町	宮内町	宮内町	五代町
主な祭神	ににぎのみこと 瓊瓊杵尊	ほすせりのみこと 火閼降命	このはなさくやひめ 木花咲耶姫	あめのほあかりのみこと 天火明命
瓊瓊杵尊との関係	本人	子	后	兄(子)

薩摩川内市所在の御陵

川内地域には御陵とされる場所が4カ所存在します。可愛山陵・中陵・端陵・川合陵がそれにあたりますが、書物によっては、呼称や詳細が現在のものと一致しない部分もみられます。さまざまなお見解もありますが、明治時代以降は、現在のかたちで定着したようです。(左表)

【問合先】=教育委員会文化課 ☎(23)5111(内線5233)